

## 9) ギボウシ=擬宝珠

ギボウシはユリ科ギボウシ属の総称で、東南アジアを初め日本各地の山野や草原に自生する。湿原や水辺、森林内また岩場などの日向を好み、変異も多く耐寒性も強い多年草で、しばしば鑑賞用としても栽培されている。このため園芸品種も多く、また花の濃淡や斑入り葉、さらには草丈などの変化も多彩で、その数は数十種に及ぶ。一般的に山野に自生するギボウシは高さ 30~50cm で、葉は根ぎわより根生し、その形は先の尖った楕円形で長い葉柄がある。夏、葉の間から長い花茎を出し、先端に細長いロート状で、先端が 6 裂した花を横向きに多数つける。花は下から上に向かって開花し、花色は白に近い淡紫から、かなり濃いものまでさまざま、花の大きさも大小いろいろとある。花は一日花で朝開き夕刻には閉じる。主な品種はオオバギボウシ、コバギボウシ、それにイワギボウシ、ムラサキギボウシ、ミズギボウシなどである。また 18 世紀に中国から輸入したタマノカンザシといわれている品種は、夕刻に開いて翌朝には閉じる普通とは逆の一日花で芳香があり、特に楊貴妃が好んだという。和名の由来は若い花穂の形が仏像の後ろにある飾りに似ているためとか、花の形が橋などの欄干に取り付けられた擬宝珠に似ているためとか、花穂の形が葱の花に似ているため葱帽子(キボウシ)からとか、花穂の形が坊さんの頭に似ているところから『擬法師』から転訛したものとか、この他にも諸説がある。また別称としてはオンバク、ウルイヤマ、ウクルキナ、コーレツパオバコ、ウリコなどこれまた多くの呼称がある。学名は『*Hosta*』で、オーストラリアの医師 N.T.ホスタ氏の名前に因む。イギリスでは『plantain』、中国では『玉簪』(タマカンザシ)とか、『紫簪』(ムラサキカンザシ)と呼ばれており、漢代には簪として髪に飾られたことに由来する。また中国の伝説によれば、笛の名手であった男が、天女の所望に答えて一曲奏でると、天女はそのお礼に自分の髪に挿していた簪を地上に投げた。すると見なれない植物が現れ、美しい花を咲かせたために、この花を『玉簪』と名付けたのだという。メルヘンな話である。園芸種には花径 5cm に及ぶものや八重咲きのもの、葉に美しい斑の入るものなどがある。

さてギボウシが初めて文献に登場するのは江戸時代中期の『饅頭屋本節用集』で『秋法師』として記載され、1666 年に著わされた『訓蒙図彙』(キンモウズイ)には『玉簪』が図示され、その後貝原益軒が 1709 年に著わした『大和本草』には、朝鮮から渡来した『高麗ギボウシ』を初め、数種類のギボウシ類が紹介されている。ヨーロッパにギボウシが紹介されたのは 18 世紀の初めのことで、その後 18 世紀の末には中国からムラサキギボウシが伝えられた。19 世紀にはシーボルトがスジギボウシなど数種類をヨーロッパに伝えたが、この花の愛好家は日本より欧米諸国に多く、日本では、正当な評価を受けていないように思う。ギボウシは鑑賞用として、またウルイと呼ばれたオオバギボウシは山菜として食用にされ、特にギボウシの若い葉はお浸しや和え物、天ぷらなどとして食用にすることもできる。生の茎の汁は腫物に効くという。



ギボウシは日本よりも海外で愛倍されることが多い。写真は太輪のギボウシ(栽培品)。



草原でスックと伸びたギボウシ、まるで夏の野原を見渡すようだ(長野県白樺湖)。



アキアカネが羽を休めるギボウシの花穂(長野県蓼科高原)。



ギボウシは陽当たりと湿り気を好む。このため高原地帯の湿原などに自生し、中には色の濃いもの、淡いもの、花の大きいもの、小さいものなど種々の変種がある。写真は八重の白花種(栽培品)。



斑入り葉種。さまざまな種類があり、立派な観葉植物である(栽培品)。



斑入り葉で白花のギボウシ(栽培品)。

[目次に戻る](#)